

---



---

 学内活動報告
 

---



---

医療看護研究31 P.55-61 (2023)

## 「多文化の医療と看護－海外研修－」のコロナ禍における取り組み

## The Initiatives for the Intercultural Healthcare and Nursing - Overseas Training during COVID-19 situation

池田 恵 <sup>1)2)</sup> IKEDA Megumi	金子 育世 <sup>1)2)</sup> KANEKO Ikuyo	グロウ デボラ アン <sup>1)</sup> GROW Deborah Anne
櫻井 しのぶ <sup>1)2)</sup> SAKURAI Shinobu	野崎 真奈美 <sup>1)2)</sup> NOZAKI Manami	若林 律子 <sup>1)2)</sup> WAKABAYASHI Ritsuko
寺岡 三左子 <sup>1)2)</sup> TERAOKA Misako	中山 仁志 <sup>1)2)</sup> NAKAYAMA Hitoshi	岡本 美代子 <sup>1)2)</sup> OKAMOTO Miyoko
宮本 圭 <sup>1)</sup> MIYAMOTO Kei	中西 唯公 <sup>3)</sup> NAKANISHI Yuko	

## I. はじめに

新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる世界的な渡航制限により、これまで取り組んできた海外研修や外国人研修生の受け入れ等を通じた大学のグローバルな取り組みは大きな影響を受けている。医療看護学部でも2020年2月から約2年間、従来実施していた学部間協定を締結している大学等での海外研修(イギリス、アメリカ、タイ)は、全て中止を余儀なくされた。

本学部のディプロマポリシーの1つに「グローバリゼーションが進む現代社会に柔軟に対応でき、多様な価値観を理解し、適切な判断と問題解決ができる能力」があげられている。沼田(2012)は、日本人大学生の異文化理解の現状はきわめて複雑であるため、その理解に対する教育方法もあわせて多様な方法で実施することの必要性を示しており、国際交流委員会でも学生の今しかできないグローバルな学びや体験を保証する

ために、ICTを活用した新しい国際交流の形や可能性について、学部間協定を締結している大学の担当者らの協力を得て検討を重ねてきた。清藤ら(2021)は、2020年に先駆的に行なったオンライン留学の効果の検証を行い、グローバル人材育成という観点からバーチャル空間で行う留学には一定の効果があることを明らかにしている。また、松尾ら(2021)もオンライン海外研修に参加した看護学生を含む医療系大学生は、研修前と比較し英語によるコミュニケーションの心配が有意に低減し、英語力への自信が有意に向上することを明らかにしており、本委員会においても渡航が制限されている中でオンラインによる海外研修を企画・運営することには意義があると考えた。

そこで本学部では、2021年度に選択科目「多文化の医療と看護(海外研修)」の単位修得が可能となるオンライン研修プログラムをイギリスのデモンフォート大学(以下DMU)と連携して企画・実施したため、その取り組みの概要について報告する。

## II. 概要

## 1. 学修目標・到達目標

本研修の学修目標は、「異文化を理解し、グローバルな視点での看護実践や研究の展開、異文化看護領域

1) 順天堂大学医療看護学部

Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University

2) 順天堂大学大学院医療看護学研究科

Graduate School of Health Care and Nursing, Juntendo University

3) 順天堂大学スポーツ健康科学部

Faculty of Health and Sports Science, Juntendo University

のリーダーシップに資する基礎的能力を養うこと」である。到達目標は以下の5つとした。①イギリスの文化について述べるができる。②イギリスの看護教育、看護師の職域、チーム医療について述べるができる。③イギリスにおける保険制度・医療の現場と課題、日本と比較した長所・短所を述べるができる。④イギリスの医療福祉保健関連施設等におけるケアについて述べるができる。⑤イギリスの健康に関する信念と実践について述べるができる。

## 2. 研修期間とプログラム内容

1) 研修期間：2021年10月22日～2022年3月25日

2) 研修プログラム内容

研修プログラムの内容は表1に示す。ネイティブ英語教員による英語補講、動画視聴、文献学習、Web会議システム（以下Zoom）によるライブディスカッション、電子掲示板（以下Padlet）を用いたオンライン交流などを組み合わせた研修プログラムで、研修費

用は無料とした。

2021年11月～2022年1月まで急遽DMU側の都合により当初計画していた研修プログラムが実施できず、2022年2月26日より修正を加えての研修実施となった。最終的に本学部では2年生16名が単位履修し、DMU教員2名、DMU学生3～6名が3回のライブディスカッションに参加、Padletには計13名のDMU学生が参加し交流をおこなった。

## 3. 事前準備

イギリス研修担当者はDMU担当者らとメール及びZoom会議を複数回繰り返し、オンラインによる研修プログラムの可能なスケジュール、交流方法、研修内容などについて検討した。日英双方の学生のメリットや本学部の学生の学修目標・到達目標が到達できるような内容にするため、さまざまな交流ツールを試用し、最終的にPadletを交流ツールとして採用することとした。

表1 研修プログラム内容

回	授業形態	内容
1	対面	英語補講①
2	対面	英語補講②
3	Zoom	研修オリエンテーション 学習動画、文献紹介
4	動画視聴	レスター大学病院、レスターパートナーシップ施設に関連する動画視聴 (成人病棟、小児・思春期メンタルヘルス病棟、救急外来、手術室、高齢者フレイルティ病棟など)
5	自己学習	文献学習 ・イギリスのヘルスケアシステムについて ・イギリスの看護教育について
6	Zoom	動画視聴・文献学習の振り返り
7	自己学習 Padlet	・Padletをダウンロードしアクセスできるように準備をする。 ・自己紹介動画（英語）を撮影し、Padletにアップロードする
8	Zoom	研修オリエンテーション2 ・Padlet活用について
9	動画視聴 Padlet	講義① 「イギリスの看護教育について」“Nursing education in the UK”
10	Zoom	DMU学生とのディスカッション 「文化によるケアの違い」“Culture of Care”
11	動画視聴 Padlet	講義② 「グローバルヘルス」“Global health”
12	動画視聴 Padlet	講義③ 「イギリスのヘルスケアシステムについて」“Health care system in the UK”
13	Zoom	DMU学生とのディスカッション 「看護学生としての体験、経験について」“Share the experience of student nurse. What is going well? What is not going so well? What would you like to change?”
14	Zoom	DMU学生とのディスカッション 「文化紹介・季節のイベント」“Seasonal events”
15	自己学習 Padlet	プレゼンテーションを作成し、Padletにアップロードする

#### 4. 電子掲示板 (Padlet) の活用 (図1)

PadletはWebブラウザで使用できるオンライン掲示板アプリで、テキスト、画像、音声、動画、手書きなど様々な情報を投稿し、参加者がリアルタイムで閲覧やコメントできるツールである。代表者がPadletボードを作成し、共有を許可された研修参加学生と教員のみが閲覧、書き込みできるようプライバシーを保持して使用した。ここでは、学生の自己紹介動画、プレゼンテーション動画、オンデマンド講義等を投稿し、視聴した学生達はコメントや質問ができるように設定し、本学部の学生には視聴後のコメントの掲載を課題とした。自己紹介動画と最終プレゼンテーションについては、学生各自で英文と動画を作成し、殆どの学生がネイティブ教員によるフィードバックを受けた後に各自でPadlet上に投稿した。

#### 5. Zoomでのライブディスカッション、文化交流

初回は学生達を2グループに分けてディスカッションをおこなった。「Culture of Care (文化によるケアの違い)」というテーマで、ケアをする上で大事にしていることや自分達が実践しているケアの特徴などについて発表しあった。

2回目以降は、学生達の発言の機会が増えるよう4~5名ずつの少人数のグループに分けてディスカッ

ションをおこなった。2回目は「Share the experience of student nurse. (看護学生としての体験、経験について)」というテーマで事前に①What is going well? (上手くいっていることとは?) ②What is not going so well? (あまり上手くいっていないこととは?) ③What would you like to change? (何を変更しますか?) という3つの質問への回答の準備を双方の学生に課した。

3回目は「Seasonal events (季節のイベント)」で本学部の学生がプレゼンテーションを作成し、両国の文化の違いについて意見交換をおこなった。

### III. 結果

#### 1. 学修成果

Padletへの投稿、動画視聴後の課題、ディスカッション、プレゼンテーション、課題レポートなどから学修目標の到達の確認をおこない、棄権した1名を除いた履修者16名全員が単位認定された。

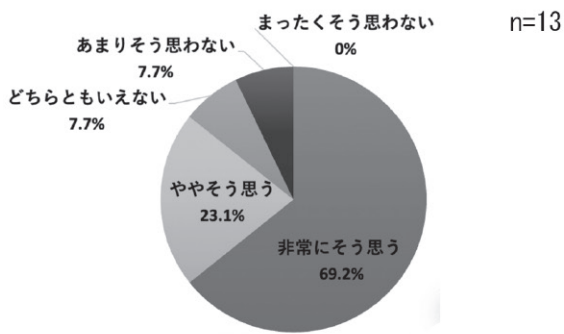
#### 2. 学生による研修プログラム評価

DMU教員による講義動画やZoomでのライブディスカッションについての評価は、それぞれの視聴後および授業後に参加した学生を対象におこなった。図2に主な結果を示した。

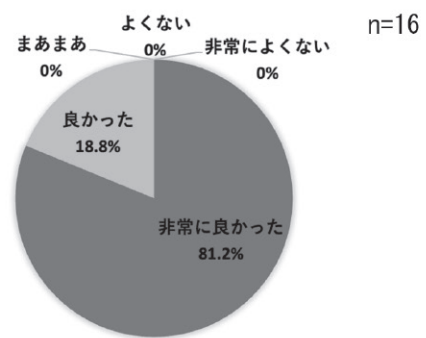


図1 本プログラム用Padlet (一部抜粋)

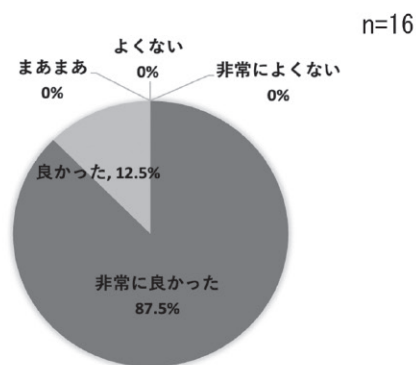
## 1. Padlet を使用した交流は満足できるものか



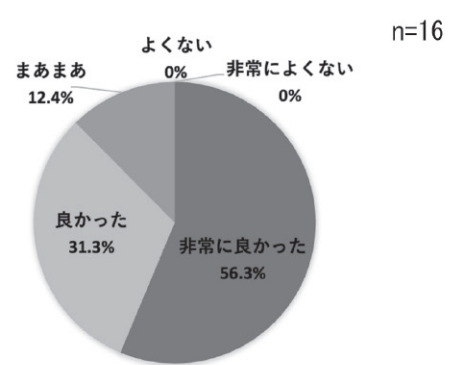
## 2. 講義「イギリスの看護教育」について



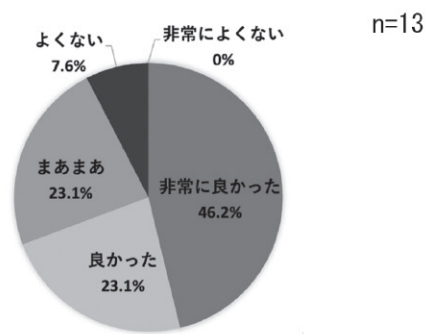
## 3. 講義「グローバルヘルス」について



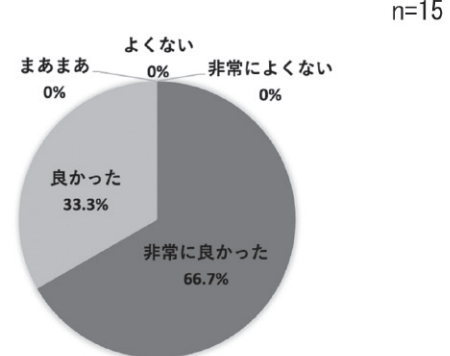
## 4. 講義「イギリスのヘルスケアシステム」について



## 5. ライブディスカッション（1回目）



## 6. ライブディスカッション（2回目）



## 7. ライブディスカッション（3回目）

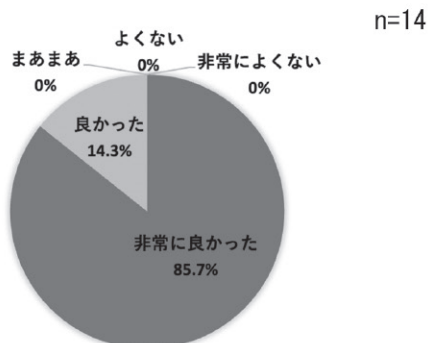


図2 研修プログラムの評価結果

## &lt;自由記載 主な意見&gt;

## 1. 講義「イギリスの看護教育」について

- 場所、言語、看護師免許を取るまでの過程など、日本と異なることは多いですが、看護への思いは一緒であると感じた。
- 学習障害について特化した分野があると知り、どのような実習や勉強をしているのか知ってみたいと思ったし、どうして学習障害という分野が存在するのか知りたいと思った。
- 1からイギリスの看護学生のことについて知ることができた。繰り返し見たり聞いたりして、振り返ることができた。

## 2. 講義「グローバルヘルス」について

- イギリスの生徒さんが作られたパンフレットを拝見することで、日本でも問題として挙げられる健康格差などについて関心を示し、様々な角度から問題を考え改善策などについても学習しているという事を学ぶことができ、今自分が実際に勉強していることをどのように活かしていけばいいのかという事を他国の生徒さんの学習態度から学ぶことができとても有意義な学びであった。
- DMUの学生の発表資料はとてもわかりやすく、よく学ぶことができたから。特にイギリス独特の視点でグローバルヘルスについて考えているところはとても参考になった。

## 3. 講義「イギリスのヘルスケアシステム」について

- 事前学習で学んだNHSの仕組みのことだけでなく、その歴史やお金の内訳などを知ることができたため。とくにNHSの起源についての話は興味深かった。またNHSの受容は高く、広い範囲の人々の医療を支え、かつ医療体制も整えていることがすごいと思った。
- NHSにも欠点はあるので、一概にNHSが素晴らしいと言えるわけではないが、日本とは異なるオリジナルなシステムなので比較してみると面白いと思った。
- 英語のスピードが早く、理解が追いつかず、内容理解に随分と時間がかかったが、何度も何度も聞き直し、耳が英語に慣れ始めてきた。

## 4. ライブディスカッション（1回目）

- 初めてイギリスの学生とディスカッションをして、話していることを聞き取ることの難しさを実際に体感できた。今回のディスカッションを経験してもっと英会話、英語を勉強しようと思えた。
- 初めてのことで緊張していたが、先生含めDMUの生徒さんたちも積極的に話題を出してくれた。このディスカッションを終えて、自分の英語のレベルについてショックを受けたが、再度英語を勉強するチャンスだと思って、英語の学習についてやる気が出た。また、次回のディスカッションのためにしっかり準備して、より積極的に話をしていこうと思った。
- たと言っていることがわからなくても、間違っていたとしても、どんどん発言していくことが自分の成長につながると信じて、次回はディスカッションをしていこうと思う。

## 5. ライブディスカッション（2回目）

- 今回の授業では、積極的に質問をしたり意見を言ったり笑顔で聴くことができたと思う。学生さんや先生方がゆっくり話してくれたり、相槌を打ってくれたり、伝わるように何度か話してくれ、とても優しいな、感謝しなければいけないなと思った。
- 小さいグループに分かれてディスカッションできたことが良かった。大人数の前で発言するには勇気が必要なので緊張するが、少人数だとリラックスして発言することができた。
- 今回は少数に分かれて授業を受けて、前回よりもたくさん発言できたとし、コミュニケーションを取っている感じがした。
- 今回は自分で積極的にコミュニケーションを取ることができた。自分にはあまり単語力がないとっていて不安な部分もあったが、なんとか自分の考えを相手に伝えることができてとても嬉しかった。

## 6. ライブディスカッション（3回目）

- 今回がラストディスカッションだったが、3回目にしてイギリス英語の聞き取りも上達し、会話もどんどん進めることができた。やっとお互いのことがわかってきて、英語も聞き取れるようになったので、これが最後ということが本当に悲しいと思った。
- 前回よりも英語で会話に参加することができた。自由に会話することは大変だったけれど、沢山の質問ができたし、一緒に会話をしたDMUの生徒の文化を知ることができて楽しかった。
- 国内で様々な文化を持った人と関われることはとても良いことだと思う。これは看護や医療のグローバル化にも繋がることだ。いろんな文化に触れることで他の文化への理解が深まると思う。

## 1) Padletの活用

Padletは日英の学生同士で積極的に意見交換ができる場として機能していた。デジタルネイティブの学生達は、直ぐにこのツールを活用しており、アクティブに交流をしていたのが印象的であった。Padletを使用

した交流への満足度について、84.6%が「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答している一方、「どちらともいえない」「あまりそう思わない」と回答した学生も1名(7.7%)ずつ見られた。

## 2) 講義動画の視聴

講義動画については「非常に良かった」「良かった」の評価が合わせて87.5~100%であり、繰り返し見たり聞いたりすることが可能であることも評価が高い要因であった。特にイギリスにおけるヘルスケアシステムと課題については、日本と比較した長所や短所について考える機会となっていた。またDMU学生の学習成果の紹介としてグローバルヘルスについてまとめたポスターの投稿については、同じ看護学生として刺激をうけ有意義な学びであったと反響が大きかった。

## 3) ライブディスカッション、文化交流

1回目のZoomでのライブディスカッションでは、緊張が強かったことや積極的に発言するDMU学生や教員に対して、自らの発言のタイミングを得ることなどが学生にとっては難しいようであった。しかしながらZoomでイギリス英語を聞き取り、ディスカッションする難しさや自身の英語のレベルへのショックを示しつつも、再度英語を学習するチャンスと捉えモチベーションに繋げたり、DMU学生の思いやりや優しさに感謝する発言があった。2回目以降は、学生達の発言の機会が格段に増え、リスニングやスピーキングの英語力上達を実感していた学生も多く、コミュニケーションを通して満足度も向上していた。

3回目の文化交流では、準備したプレゼンテーションに対してDMU学生達が関心を持って質問をしてくれた経験や、イギリス文化を知ることを通して交流する「楽しさ」や「異なる文化や価値観への理解」を深めていた。

## IV. まとめと今後の課題

今回のICTを活用した研修プログラムでは、先方の都合によりライブでの講義や学生交流の機会は当初の計画より少なくなりましたが、Padletの活用により、講義動画や資料を何度も繰り返し視聴でき、DMU学生や教員とのメッセージによる交流が可能となった。安田(2022)は、Padletなどのオンラインツールは、時差という遠隔交流での大きな支障がある中でも互いの考えや作成したプレゼンテーションなどを投稿することによって交流の機会を得ることができ、学習意欲やモチベーションの向上を支えていたことを明らかにしている。今回Padletの特性上、投稿した記事の表示順によってコメントの受け取り数に差が生じたり、互いのコメントへの返信が滞るといったことがあった。しかし、本学部の学生達はPadlet活用に対

し8割以上が満足感を示しており、Padletはオンライン交流の有効なツールの一つであり、今後の研修プログラムのツールとして有用であると考えられる。

また、Zoomによるライブディスカッションでは、少人数のグループに分けることで学生達の発言の機会が増え、また回数を重ねるごとに英語でコミュニケーションをとることの緊張感や羞恥心が薄れ、英語力も向上して自信や語学学習のモチベーションに繋がっている様子や感想も見られた。ディスカッションテーマの順序性やグループ人数等は今後の課題となるが、ディスカッションによる学びは大きかったと考える。この様に、現地の看護学生や教員とPadletを活用した交流や自己学習、ライブディスカッションによる交流を組み合わせたことは、本研修プログラムの利点である。

国際交流におけるオンライン教育の課題として、時差の問題がある。イギリスとは9時間(サマータイム8時間)の時差があるため、双方の学生の都合上、今回の研修プログラムではZoomライブディスカッションを土曜日の日本時間17:30から開催した。DMU学生にとっては土曜日の朝8:30という時間であり、参加者を募る難しさがあった。時差を考慮し、双方の学生や教員に負担の少ない方法や時間帯を設定することが求められるが、この様にライブディスカッション等の交流に時差という時間的制約が生じることは、本研修プログラムの課題である。

コロナ禍を契機に飛躍的にICTの活用が進み、海外学生とのライブディスカッション等を含む研修実施が可能になり、オンラインで海外の学生と交流する環境を構築することが容易となった。現地訪問が困難な状況においては、今回実施したようなオンライン研修プログラムの実施は学生にとって有意義な学修の機会となる。現地を実際に訪問して学ぶ対面型の留学(海外研修)は、講義や実習時間以外での学生同士の交流や現地での生活や文化などの「体験」を通して学ぶ機会であり、「リアルな体験」の価値は言うまでもない。

今回紹介した研修プログラムの学修成果として、難易度および経験させた内容については適切であったと判断する。研修プログラム内容の評価については、本学部の参加学生による参加者評価と日英の研修担当者による振り返りをおこなった。このようなICTを活用したオンライン研修プログラムは初めての試みであったため、両国の研修担当者がお互いのノウハウを情報共有し、検討を重ねてプログラムを開発したという

経緯がある。富田ら(2015)は、質の高い国際交流プログラムの開発には、プログラムの実践で得られたノウハウが学内外で共有される仕組みづくりや、学習者が学修目標や参加の前提として求められているものを理解するための枠組みが必要であると述べている。また奨学金や補助金を提供する行政にとっても、公平な資金配分と優先して支援すべきプログラムを選考する際の尺度が求められることから、国際交流プログラムを評価するツールとしてルーブリックの開発をおこなっている。さらに、短期留学による学生の情動的・心理的变化を客観的に評価するBEVI(The Beliefs, Events and Values Inventory)を活用した報告(西谷, 2017; 清藤, 2021)や理工系人材を対象とした異文化対応能力評価(MGUDS-S: Miville-Guzman Universality Diversity Scale, Short form)日本語版の開発とその評価ツールを活用したオンライン留学プログラムの効果測定についても報告され始めている(織田, 2019; Aihara, 2021)。本学部では、今回研修プログラムを実施したイギリスのみならず、タイやアメリカでの研修プログラムも企画・運営している。今後はそれぞれの研修プログラムの成果を比較でき、さらにはグローバルに看護学生を対象とした研修プログラムを評価できるような世界基準の評価ツールについても確立していく必要があると考える。

現在、渡航や出入国時の規制が徐々に緩和され始めており、現地での病院見学や実習等の実施が可能となった際には、現地での研修の実施を再開する予定である。松井(2020)がデジタルを活用した新たなグローバル人材育成の可能性について示唆するように、本学部においても現地での研修を再開しつつもオンライン型の研修のメリットを上手に活用し、現地研修とオンラインによる交流とを組み合わせ合わせたBlended/Hybrid型など学生にとって有意義な国際交流プログラムを企画・運営・評価していきたい。

## V. 引用・参考文献

- Aihara, S., Yoshikubo, H.(2021). Measuring Global Competency as the Role of IR, *International Journal of Institutional Research and Management International Institute of Applied Informatics* 5(1), 80-95.
- 清藤隆春, 橋本智(2021). BEVIを用いたオンライン留学の効果測定-コロナ禍でのグローバル人材育成の試み-, 2020年度徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報, 12-21.
- 松井一彦(2020). コロナの時代におけるグローバル人材育成-大学等を中心に-, *立法と調査*, 11(429), 72-87. [https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou\\_chousa/backnumber/2020pdf/20201102072.pdf](https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rippou_chousa/backnumber/2020pdf/20201102072.pdf)
- 松尾まき, 朝澤恭子, 折元美雪, 他(2021). 医療系大学生におけるオンライン短期海外研修を通じた異文化受容, 英語への意識およびコミュニケーション・スキルの変化, *東京医療保健大学紀要*, 1, 1-8
- 西谷元(2017). 留学効果の客観的測定・プログラムの質保証-The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI-j) -. 広島大学高等教育研究開発センター高等教育研究叢書. 137, 45-70.
- 沼田潤(2012). 日本人大学生における異文化理解の現状, *人間環境学研究*, 10(2), 59-64.
- 織田佐由子(2019). 理工系人材のグローバル・コンピテンシーの開発と評価, 芝浦工業大学博士学位論文, 2019. <https://core.ac.uk/download/pdf/235184122.pdf>
- 富田英司, 近森憲助, 中山晃, 他(2015). 国際交流プログラムを評価するルーブリックの開発, *大学教育実践ジャーナル*, 13, 9-15, [https://web.opar.ehime-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2015/04/J13-2\\_tomida.pdf](https://web.opar.ehime-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2015/04/J13-2_tomida.pdf)
- 安田有紀子(2022). Padletを活用した海外大学との相互学習プロジェクト, *教職教育センタージャーナル*, 8, 39-48. [https://www.kobegakuin.ac.jp/files/facility/tec/journal/journal\\_202203\\_05.pdf](https://www.kobegakuin.ac.jp/files/facility/tec/journal/journal_202203_05.pdf)